

# 史跡安宅氏城館跡の中世石塔群－中山城跡の宝篋印塔と五輪塔－

佐藤 純 一

## 1. はじめに

史跡安宅氏城館跡は、令和2年3月10日付で国史跡に指定された和歌山県内初の中世城館遺跡である。紀伊半島南西岸部の日置川下流域を中心とし、10箇所もの城館が集中的に築かれ、このうち5箇所の城館跡（安宅氏居館跡、八幡山城跡、中山城跡、土井城跡、要害山城跡）が指定されている。白浜町では、「史跡安宅氏城館跡保存活用計画」を策定するとともに、追加指定に向けた発掘調査を実施し、継続的な保存と活用を図っている<sup>(1)</sup>。

本稿では、史跡安宅氏城館跡の構成要素のひとつである中山城跡で、新たに発見された中世石塔群について、資料紹介をおこなう。

## 2. 中山城跡の概要

中山城跡は、安宅地域よりやや日置川を遡った田野井地域に位置する（図1）。旧日置川河道による環状丘陵となっており、現流路と旧流路が形成した谷によって、独立丘陵状を呈している。最高所は標高約38m、大小ふたつの方形の曲輪が組み合わさる。東側を除いた三方向に対して、二重の横堀で曲輪を囲繞している。その立地や構造から「館城」としての評価もされてきたが、現在では遺物の量や種類から常時居住する施設ではなく、田野井地域、ひいては安宅荘の北側境目を意識した防御拠点のひとつと考えられている（白石2022）。遺物の出土量は、八幡山城跡や要害山城跡と比較して非常に少ないが、15世紀後半から16世紀初頭の陶磁器類を主としながら、16世紀後半や17世紀前半の遺物も出土している。上記二城の出土遺物が15世紀後半から16世紀初頭という比較的限定された時期を示すことを鑑みると、それらと異なる出土状況は中山城跡の位置づけを考える上で重要である。

また、明応の政変以後の足利將軍家の分裂や守護畠山氏の内訌に伴う戦乱時に、北陸の足利義植と紀伊の畠山尚順（尚慶・卜山）間の連携において活躍した畠

今回紹介する石塔群については、白石博則氏による地元の方々への聞き取り調査の結果、発見されたものである（白石2022）。中世城館との関わりを想起させる石塔群として貴重な資料となる。ただし、その報告中では、「小振りの砂岩製の宝篋印塔が約五体、バラバラになりながらも存在する。（中略）、中世のものとして見てよいだろう。」とされているものの、詳細な検討には至っていないため、本稿であらためて報告させていただくものである。さらに、中山城跡の南側丘陵の東麓部にも、近世期の板碑や一石五輪塔が安置されていると報告されているが、そちらについては稿を改めて資料紹介することとしたい。

山政近（畠山中務少輔家）の息千夜叉が「紀州中山城」に在陣したとされる（川口2020・2021）。この「紀州中山城」が、史跡安宅氏城館跡の中山城跡に比定されている点は、室町・戦国期の都鄙関係を示す文献・考古資料として注目される<sup>(2)</sup>。



図1 安宅氏城館跡 関連位置図

### 3. 宝篋印塔と組合式五輪塔

石塔群は、中山城跡が所在する丘陵の北西隅の斜面上に安置されている（図2）。安置場所は、長軸5m短軸2mほどの緩やかな平坦面となっており、石塔群はやや北に振った形で東西方向に一列に並んでいる（図3、写真1）。白石氏の報告のとおり、後世の改変が著しく、当初の組み合わせは保持していない。石塔群は、宝篋印塔と組合式五輪塔に分類される（表1）。

宝篋印塔は、一部欠損しているものの、相輪から台座まで各1点が遺存している（図4）。これらはすべて砂岩製であり、全体を通じて、一具とみて違和感はない。柄部分の組み合わせも齟齬は認められない。以下、各部材ごとに詳報する。

相輪は、宝珠～請花部分とそれ以下の九輪部分が折れて分離している。請花の蓮弁や九輪の擦管は、簡略化され線刻で表現されている。伏鉢部は欠損する。

笠は、地輪3の上部に安置されている。笠の隅飾りは先端を一部欠くが、二弧式で輪郭を巻いている。ただし、定型的な二弧式とは異なり、屈曲部が切り込み状となり、二段目の弧がほとんど内側に張り出さず直線的な形状を呈している（写真2）。これは、西光寺墓地（三重県熊野市育生町尾川）宝篋印塔群に代表される特徴的な形式で、北山川流域に主に分布する<sup>(3)</sup>。

基礎と塔身は、セットとなっている。塔身はまったくの素面であり、現状では梵字も確認されないが、摩滅が著しく当初よりそうなのかは判断が難しい。

基礎の上部形態は、階段状であり、基礎1類に該当する（伊藤 2011）。さらに正面形態は、方形枠をあしらい、その内側に格狭間を刻んでいる。格狭間の底面が方形枠に接していないことから、伊藤の分類中では格狭間2a類に該当する。ただし、格狭間上部の花頭状曲線はかなり簡素化し、当初様式がずいぶん崩れていることから、単純に比定すべきか否かは検討する余地がある。

台座の上には、水輪2、3が乗っている。台座も摩滅が著しいため、側面形態を判断することが難しい。あえて評価するならば、四隅間弁型（伊藤2類）となるのか。いずれにせよ定型的な様式とはやや異なる印象を抱く。

これらの宝篋印塔部材を一具と仮定した上で、年代

表1 中山城跡石塔群一覧表

単位：cm

	部材名称	高さ	幅	備考
宝篋印塔	相輪	宝珠・請花	13.2	11.2
		九輪	14.2	10.1
	笠	23.5	22.9	尾川型
	塔身	18.6	14.5	表地無文か
	基礎	23.8	24.8	基礎1類、格狭間2a類
	台座	14.2	36.8	2類
組合式五輪塔	空風輪1	19.4	12.9	
	空風輪2	18.9	12.9	
	空風輪3	21.5	14.0	
	火輪1	12.2	17.5	
	火輪2	14.2	21.0	
	水輪1	17.9	23.0	
	水輪2	14.0	18.9	
	水輪3	17.2	21.6	
	地輪1	(13.5)	19.2	下部、土中のため参考値
	地輪2	17.5	21.9	
地輪3	(13.7)	23.0	下部、土中のため参考値	

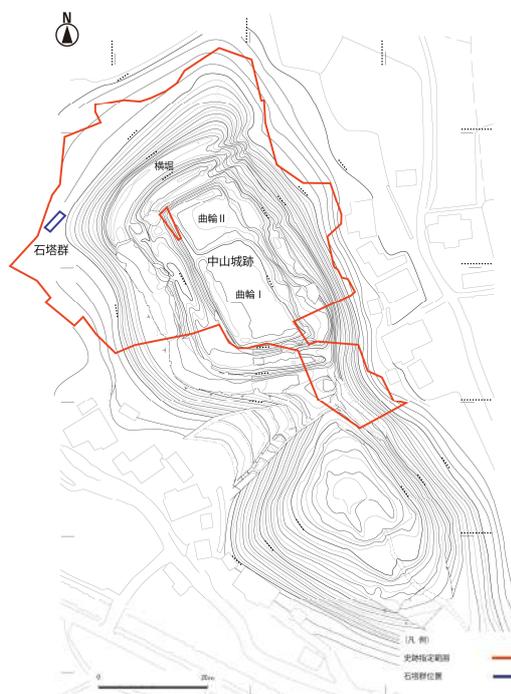


図2 中山城跡 測量図・石塔群 位置図

観を検討したい。まず特徴的な隅飾りであるが、前述のとおり「尾川型」と呼ばれるものと共通する。北山川流域のこれらの宝篋印塔のうち西光寺墓地例は、弘治4年（1558）～天正14年（1586）の紀年銘をもつことが知られている（三重県教委 2009）。

また、基礎の格狭間の規範が崩れている点に注目したい。前述の西光寺墓地例でも形状こそ異なるものの、格狭間の規範が大きく崩れている。その他の熊野の事例でも16世紀前半～後半のものには、格狭間の多様性が指摘されている（伊藤 2011）。

以上の検討から、中山城跡の宝篋印塔は、大きくは戦国期（16世紀前半～後半）伊藤Ⅳ期に比定され（伊藤 2011）、北山川流域の宝篋印塔との繋がりを重視するならば、16世紀後半代に限定できる可能性もある。

五輪塔の部材は、空風輪3点、火輪2点、水輪3点、地輪3点が確認され、少なくとも組合式五輪塔が3基

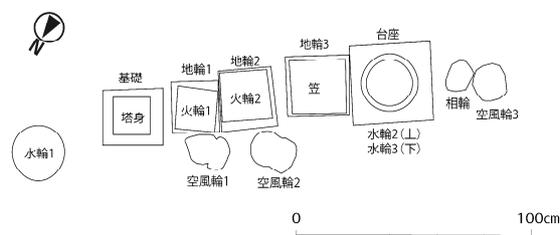


図3 中山城跡石塔群 配置模式図

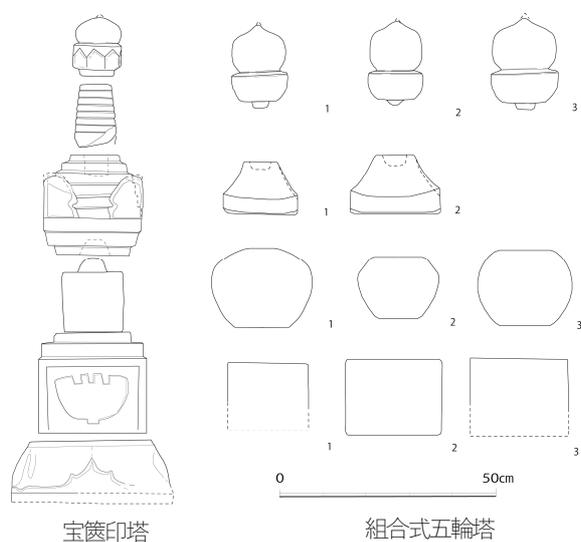


図4 中山城跡石塔群 実測図

以上存在したものとみられる（表1、図4）。

宝篋印塔と同じくすべて砂岩製である。やや小型の一群（火輪1、水輪2）のように、多少の差異はあれども、規格性が高いことから時期差は少ないと捉えられる。現状では、室町～戦国期（15～16世紀代）に属するだろうというおおまかな年代観の提示に留めておく。



写真1 中山城跡 石塔群（北側より撮影）



写真2 中山城跡 宝篋印塔（笠）



写真3 宝勝寺 文禄5年銘宝篋印塔（笠）

#### 4. 石塔群の評価

前節で概要を報告してきた石塔群について、周辺状況を加味しつつ、評価したい。

まずは日置川流域における中世石造物の研究について触れる。安宅氏の菩提寺である宝勝寺（白浜町矢田）の文禄5年（1596）銘宝篋印塔（安宅玄蕃）や天正18年（1590）銘五輪塔地輪といった紀年銘資料は報告されてきたものの（異ほか1974・1995）、悉皆的な調査については、日置川町史編さん事業に伴う北野隆亮の報告を待たなければならない（北野2005）。

以下、北野の調査報告による。中世の石造物は和歌山県内一円に分布するものの、高野山や根来寺といった紀北の大規模寺院に集中する傾向があり、紀中・紀南では、紀北と比較して種類・数量ともに低調とされ

る。そのなかで、日置川流域（旧日置川町）においては、中世に系譜をもつと考えられる石造物の総数が500点以上認められ、紀南では突出した石造物集中地域であると考えられている。

日置川流域石造物集中地点のうち、長寿寺墓地（白浜町大古）について、石造物悉皆調査が実施されている。調査を実施した中世石造物は、総数195点を数え、宝篋印塔11基以上、組合式五輪塔18基以上、一石五輪塔78基以上、石仏5基、五輪塔板碑2基の合計114基以上となっている。ただし、いずれも紀年銘をもたない。

まとまった数の宝篋印塔が存在していることから、それらの最大値の組み合わせを検討した結果、高さ約

107 cmの規模を測る宝篋印塔を復元されている。この大きさは、日置川流域で唯一完存するトモリ山宝篋印塔（白浜町小川）の事例とほぼ同一の規模となり、日置川流域における宝篋印塔の最大値を示すものと理解されている。

さて、中山城跡の宝篋印塔の復元高は103.2 cmを測り、欠損部を補うと上記の数値と近似する。このことから、本例も日置川流域における宝篋印塔の最大値の範囲内に属することがわかる。一方で、笠の隅飾りの

型式は、周辺で類例がないものである。すでに指摘してきたように「尾川型」に属し、さらに16世紀後半代に比定される可能性がある。年代的にはさらに新しくなるが、文禄5年銘宝篋印塔（宝勝寺）や中世後期に属するトモリ山宝篋印塔や長寿寺墓地宝篋印塔の隅飾りの型式とも異なる（写真3）。このことから、中山城跡の宝篋印塔は、日置川流域のなかでも、やや特異な位置づけとなる点が注目される。むろん時期比定について、より詳細な検討が必要なことは言を俟たない。

## 5. 結語

今回、紹介した石塔群は、史跡安宅氏城館跡の中山城跡の史跡範囲に安置されている。後世の移動も念頭に置かねばならないが、地域に残る伝承からそもそも同一丘陵上にあった可能性は高い（山崎1966）。

安宅氏城館跡のその他の城館跡内では石造物の類は確認されておらず、貴重な事例といえよう。

本例の時期を限定することは難しいが、中山城が機能していた時期に併行する可能性があり、城館と石塔群との関係性を検討する格好の材料となろう。

また、特徴的な「尾川型」に比定される宝篋印塔の

存在は、奥熊野、より直接的には北山川流域との関連が想起される。その具体的な意義づけについては、今後の課題とさせて頂くこととしたいが、大永3年(1523)における日置川河口部の出月宮再興の奉加者中に、「きた（北）山小三郎」がいることをひとつの手がかりとして検討していきたい（佐藤2021）。

本稿を成すにあたり、伊藤裕偉氏、北野隆亮氏、白石博則氏にご教示頂いた。末筆ながら、記して感謝したい。なお、図表類はすべて筆者作成である。

### 【 注 】

- (1) 『史跡安宅氏城館跡保存活用計画』において、安宅氏の来歴、各城館跡の内容、史跡指定に至る経緯と経過等を詳細に報告している（白浜町教育委員会2022）。なお、本書は白浜町公式ホームページ上でダウンロードが可能のため、ご活用頂きたい。
- (2) 紀伊国の中山城は、同時代史料では確認できず、近世地誌類である『紀伊続風土記』における安宅荘での記載がもっとも古い事例となる。田辺市新庄町の「伝中山城跡」や東牟婁郡那智勝浦町の「中山城跡」が現在では伝わるが、立地や構造から、それらを「紀州中山城」とする蓋然性は低い（白石2022）。なお、「紀州中山城」が登場する史料は、「足利義植御内書写「座右抄」巻四（義植七二）」である（川口2020、2021）。
- (3) 北山川流域に分布するいわゆる「尾川型」については、伊藤裕偉氏のご教示による。

### 【 参考引用文献 】

- 伊藤裕偉 2011 「宝篋印塔から見た熊野」『聖地熊野の舞台裏』高志書院 175p～209p  
川口成人 2020 「畠山政近の動向と畠山中務少輔家の展開」『年報中世史研究第45号』中世史研究会 103p～131p  
川口成人 2021 「室町～戦国初期の畠山一門と紀伊」『和歌山地方史研究81』和歌山地方史研究会 3p～16p  
北野隆亮 2005 「四 石造物」『日置川町史第一巻中世編』日置川町史編さん委員会 700p～753p  
阪本敏行・佐藤純一 2022 「和歌山県古座川町川口城跡周辺の中世考古資料」『紀伊考古学研究第25号』紀伊考古学研究会 79p～84p  
佐藤純一 2021 「熊野水軍が築いた城館—史跡安宅氏城館跡を中心に—」『熊野水軍小山人家文書の総合的研究』神奈川大学日本常民文化研究所調査報告第29集 35p～55p  
白石博則 2022 「安宅荘の城館と地域社会—その1 白浜町田野井周辺」『熊野No.163』紀南文化財研究会 1p～23p  
白浜町教育委員会編 2022 『史跡安宅氏城館跡保存活用計画』  
巽三郎・愛甲昇寛編 1974 『紀伊国金石文集成』真陽社  
巽三郎・愛甲昇寛・小賀直樹編 1995 『紀伊国金石文集成 続編』真陽社  
三重県教育委員会編 2009 『三重県石造物調査報告 I～東紀州地域～』光出版印刷株式会社  
山崎正男 1966 『望郷』私家版